

第2言語の作文産出における第1言語の関与

—第1言語の作文力との関連から—

石橋 玲子

(お茶の水女子大学人間文化研究科)

【問題と目的】第2言語(L2)の作文産出では、第1言語(L1)使用は必ずしもL2作文産出の干渉にはならない事が明らかになってきた(Kobayashi & Rinnert, 1994; 石橋, 1997, 1998)。石橋(1997)は、中国語母語話者の日本語学習者を対象にL1を明示的に使用させる翻訳の効果を検討し、L2の中位のレベルに特にL1使用の効果があることを見いだした。しかし、上記の研究では、被験者のL1の作文力との関連は取り上げられていない。そこで、本研究では、上記研究の翻訳の元になったL1の作文と直接日本語で書いたL2の作文を質的に比較し、L1の作文力とL2の作文力の関連を検討する。

【方法】被験者：中国語をL1とする日本語学習者60名。日本語能力により3群に分けた(上位群28名、中位群22名、下位群10名) 課題：4つのトピックから一つを選択して論説文を書かせる。手続き：第1週目、L2の日本語で直接作文産出。第2週目は、前週選択したトピックとは異なるトピックについてL1で作文産出、その後日本語に直す。分析：分析対象は、第1週目の日本語で直接産出したL2作文と第2週目のL1で書いた作文である。L2作文、及びL1作文は、それぞれ、2名の母語話者が、作文の質を規定する3つの主要構成要素—内容(具体的記述、アイディアの発展、全体的明確さ、興味、主題)、構成(書き出し、論理的つながり、結論、まとめ)、言語形式(語彙、言語形式の多様性)—の11の下位項目について5段階評定した。評定不一致は2者の平均を得点とした。

【結果と考察】各主要構成要素毎に得点を算出した。比較のために素点をパーセントに換算した。表1は、各主要構成要素別、日本語能力群別におけるL1作文とL2作文の得点の相関係数である。表1に示すように日本語能力上位群には、L1作文得点とL2の作文得点間にはほとんど相関はなかった。中位群の構成、言語形式及び、下位群の言語形式に弱い相関が見られた。表2は、質の各主要構成要素別のL2作文平均得点とL1作文平均得点である。各主要構成要素毎に日本語能力、課題(L2、L1)の2要因の分散分析を行った結果、L2、L1作文のいずれにも、内容、構成、言語形式のすべてに日本語能力のレベルの主効果が認められた($p < .01$)。更に多重比較の結果、内容、構成、言語形式のいずれもL2の作文では、上位>中位=下位、L1の作文では 上位=中位>下位間に差があった。課題に関しては言語形式のみ主効果が有意であった($P < .01$)。言語形式では交互作用も有意傾向が見られた。語彙や言語形式の多様性のような表層の言語形式ではL1の得点がL2より高いのは言語能力の熟達度から納得できる結果である。さらに、被験者の日本語能力上位群と中位群間にL1の作文力の差がなかったことは、同一被験者を対象とする石橋(1997)の日本語能力中位群におけるL1の明示的使用はL2の熟達度の制約を補完する効果があるとの主張を裏付ける結果である。また、L2の作文産出では、L1の作文力との関連が少ないことが示唆された。今後更に表層レベルの関連についての研究が必要である。

表1 L2作文得点とL1作文得点の相関係数

	日本語能力		
	上位	中位	下位
内容	.16	.27	.11
構成	.12	.34	.24
言語形式	.02	.40+	.44

+ .1>p>.05

表2 主要構成要素毎のL2作文、L1作文の平均得点 ()はSD

		日本語能力		
		上位(N=28)	中位(N=22)	下位(N=10)
内容	L2	77.9(11.1)	69.5(9.9)	66.0(8.3)
	L1	79.2(9.6)	74.3(11.5)	60.2(12.3)
構成	L2	75.9(12.3)	69.2(10.0)	62.5(5.9)
	L1	77.9(10.7)	74.1(9.4)	58.0(13.0)
言語形式	L2	74.6(10.0)	63.4(7.9)	59.5(6.4)
	L1	79.6(11.0)	74.3(11.8)	60.0(7.8)